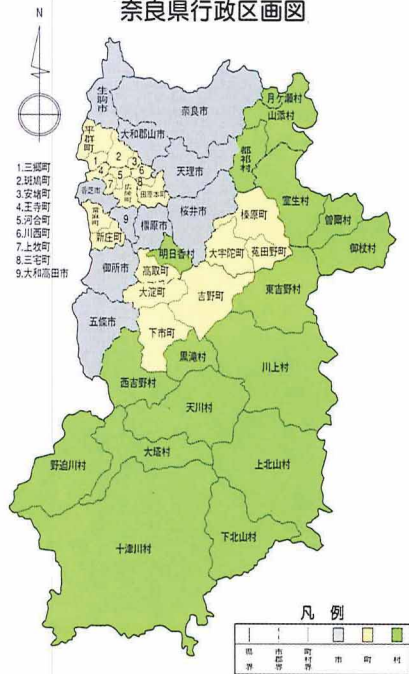


# 行政区画

市町村数 10市20町17村

奈良県行政区画図



# 位置

近畿の屋根といわれる山岳地帯を南部に持つわが奈良県は、わが国のほぼ中央部、紀伊半島の真中に位置し、周囲を山岳に囲まれた内陸県です。

	経緯度	位置
東端	東経136度14分	宇陀郡御杖村大字神末
西端	東経135度33分	吉野郡野迫川村大字弓手原
南端	北緯33度51分	吉野郡十津川村大字竹筒
北端	北緯34度47分	生駒市高山町

両極間の距離 { 東西 78.5km  
南北 103.6km

県庁所在地 奈良市登大路町30番地

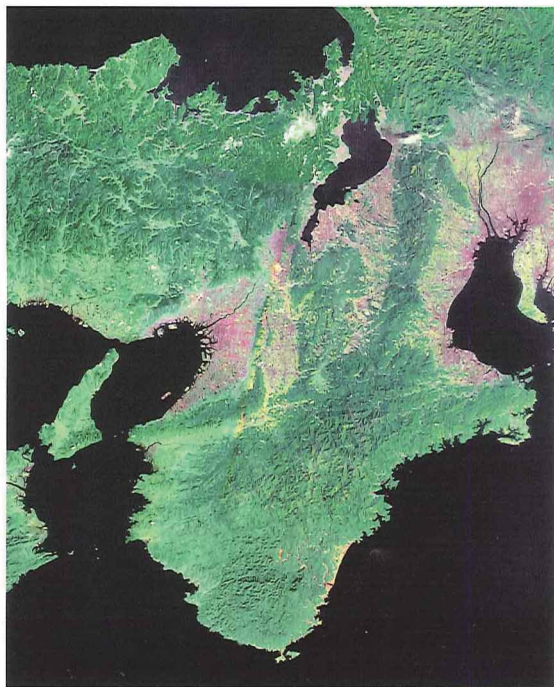
# 面積

奈良県の面積は、全国面積（377,880.25km<sup>2</sup>）の約1%の3,691.09km<sup>2</sup>です。

吉野郡十津川村は本県最大の巨村で県総面積の18.2%を占め672.35km<sup>2</sup>です。また本県最小は、磯城郡三宅町で4.07km<sup>2</sup>です。（数値は平成13年10月1日現在）

	面積	割合
奈良県	3,691.09km <sup>2</sup>	100.0%
市部	722.67km <sup>2</sup>	19.6%
郡部	2,968.42km <sup>2</sup>	80.4%

## 地形



紀伊半島

提供：(財) リモートセンシング技術センター

本県の地形は、吉野川に沿ってほぼ東西に走る中央構造線により、南部山地（吉野山地）と中央低地（北部低地）に分かれています。

北部低地は、帯瀬戸内陥落地帯の東部にあたり、断層により陥落した地溝盆地である奈良盆地を中心に、これを取りまいて生駒・葛城・笠置の各山脈、竜門山塊、奈良丘陵の山地からなっています。奈良盆地は南北30km、東西16km、面積約300km<sup>2</sup>で、海拔40～60mの非常に平坦な沖積層からなっています。河川は盆地の東南隅より流出する初瀬川を主流とし、四周の河川を合して大和川となり、生駒金剛山脈を横断して大阪平野へ流出しています。

奈良盆地東側に隣接している大和高原地区は海拔400～500mの高原です。また、宇陀山地は竜門山塊の東に位置し、標高100m前後の複雑な丘陵地帯をなし、宇陀盆地と高見山麓、室生火山群地帯とからなっています。

南部山岳地帯は本県の南部一体を占める山岳地帯で、東は台高山脈を隔て三重県に南西は和歌山県に北辺は竜門山塊によって大和平野、大和高原地区に接しています。中央部は大峰山系によって十津川流域と、北山川流域とに分けられ、大台ヶ原、伯母ヶ峰、山上ヶ岳、大天井岳、武士ヶ峰、天辻峠を連ねる横断山脈によって吉野川流域と分水嶺をなしています。大台ヶ原や大峰山脈は山岳美、溪谷美に富み、吉野・熊野国立公園に指定されています。

## 地質

西南日本における地体構造線である中央構造線は、本県のほぼ中央部に東西に貫通しています。このため本県は地質構造上南北の二部分に分かれ、それぞれ西南日本の外帯（南部山地）、内帯（北部低地）に属しています。これらの両地帯を構成する諸岩層はさらに古期、新期の二種類に分けることができます。したがって、本県の地質は基本的には北大和（内帯）、中央帯、南大和（外帯）に三大別され各部分には古期岩層と、新期岩層とがあるので、結局六つの単元に分けられます。

（参考文献：堀井甚一郎著「奈良県地誌」）

## 気象

本県の気候はその地形と同様南北で大きく相違します。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候です。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねています。すなわち南部の山地は夏は雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深くなります。一方奈良盆地はおおむね雨は少なく、夏はむし暑く、冬は底冷えがきびしくなります。全般的には台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山・がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っています。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起ります。



## 人口

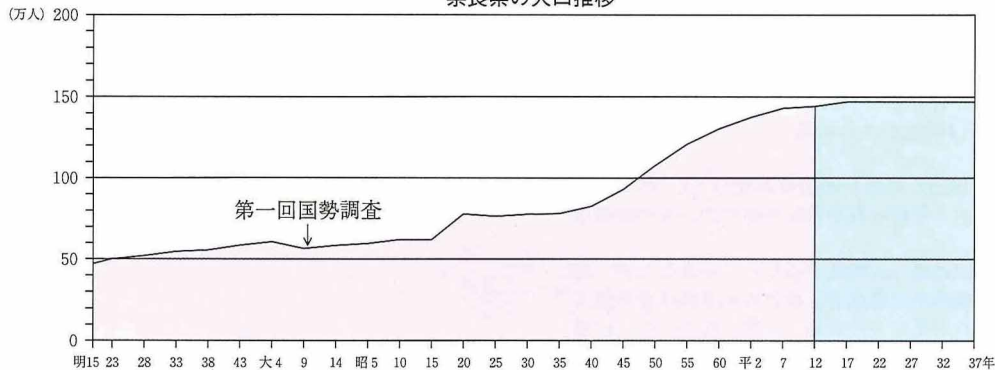
石器の材料サヌカイトの産地二上山をもつ奈良県では旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られています。

先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、近畿の人口は縄文時代にほぼ300人～4,400人の間で推移していましたが、弥生時代には108,300人程に急増したとされています。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであらうと思われるます。

大和に朝廷が成立し政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなりました。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくみると7万人前後、多く見積もって20万人の人口を持ったといわれています。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/km<sup>2</sup>程になり、唐の長安よりやや少なく平成7年の大阪市（12,510人/km<sup>2</sup>）より多くなります。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことに変わりありません。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については13万人説と6万5千人説とがあります。当時の政府が必ずしも全ての人々を把握していないため、実際の人口は

奈良県の人口推移



※明治15年～大正4年は現住人口、大正9年～平成12年は国勢調査、平成17年以降は奈良県新総合計画後期実施計画

どちらの推計でももう少し多かったであろうと考えられます。

中世の人口は史料がないため知ることができませんが、江戸時代になると八代将軍徳川吉宗の時代の享保6年(1721)から始められた全国人口調査があります。第2回は同11年に実施され、以後6年毎に行われました。この調査は、武士の人口や年少者の人口が除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口よりいくぶん過少であると思われます。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができました。

享保6年の413,331人を100とすると、天明6年(1786)には81.4(336,254人)にまで減少しましたが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年(1846)には87.4(361,157人)にまで回復しています。

明治の初めには、本県の人口もほぼ実勢に近くなり、明治5年(1872)には423,004人となっています。奈良県再設置当時の明治20年(1887)には491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示しています。

大正9年(1925)の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示しました。

その後、人口は60万人程度で安定していましたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にベビーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加しました。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部の過疎化が同時に進行しましたが、県全体としては著

しい人口の増加をみることとなります。国勢調査で対前回調査からの増加率をみると昭和45年で12.6%、55年では12.2%の高い伸びを示しました。

しかし、60年には7.9%、平成2年には5.4%、平成7年には4.0%と鈍化傾向が進み、平成12年では人口は1,442,795人で増加率は0.8%となり、昭和40年以来はじめて1%を下回りました。

このように、本県では、昭和38年以来、北西部地域が大阪という大都市の通勤圏として宅地開発が進んだこともあり、大阪を主とする他府県からの人口の流入が進み、40年代、50年代には高い転入超過を示していましたが、近年は、少子化の進行や県外からの転入者の減少などの影響などにより、伸び率は低下しています。

住民基本台帳人口移動報告によると、平成2年以降は転入超過数も減少傾向にあり、平成10年には36年ぶりに転出超過に転じ、平成12年も3年連続で転出超過になりました。

## 産業

### 〔農業〕

奈良県では、恵まれた気象条件や高い生産能力を活かして、古くから農業が発達してきました。奈良盆地には雨が少ないことから多くのため池が造られ、近世には、米の他に綿や菜種、たばこ等の商品作物が盛んに栽培され、「田畑輪換」と呼ばれる水田畑作の営農形態が確立されていました。現在は、京阪神大消費地への至近性を活かしながら高度な栽培技術を駆使した農業が行われており、県勢の発展にとって重要な役割を担っています。

大和平野地域では、米をベースに、野菜（イチゴ、トマト、ナス、ホウレンソウなど）や「花き」（キク、バラなどの切り花やシクラメンをはじめとする鉢花など）の収益性の高い施設栽培が盛んに行われています。

大和高原地域では、国営で開発された農地を中心に夏

期冷涼な気象条件を活かしたお茶や高原野菜の生産が盛んであり、畜産や植木栽培も行われています。

また、五條吉野地域の北部でも、国営で開発された農地を中心にカキやウメなどの果樹栽培が盛んであり、カキは全国屈指の産地となっています。また、南部ではワサビ、山菜、キノコなど地域の特性を活かした特産品の生産が行われています。

県では平成17年を目標とした「奈良県新農業振興計画」（新NAP）を策定し、魅力ある農業農村づくりをめざしています。

### 〔林業〕

本県の林業は、県総面積の77%を占める恵まれた森林と豊富な木材の蓄積を背景に、基幹産業として重要な地位を占めています。

吉野郡では江戸時代から植林が始まっており、森林の半数以上がスギ・ヒノキで占められ、また、明治時代には、多くの村外の地主が林業経営にのりだし、森林の大半は民有林になっています。本県の林業は、地質と気象条件に恵まれているうえ、密植多間伐という独特な育林方法がとられているため、今では民有林1ha当たりの蓄積量は全国平均の1.4倍になっています。また、木材の輸送方法も筏流しから陸送に移ったことにより、吉野・桜井地域に木材工場が発達しました。しかし、近年は山村の過疎化により、林業従事者が減少、高齢化するとともに、外材との競争の激化、代替材の進出等による木材需要の伸び悩みなど林業を取り巻く環境は厳しい状況にあります。

主要農産物等の生産量・粗生産額（平成12年）

	生産量（t）	粗生産額(百万円)	生産額 全国順位
かき	27,400	4,639	3位
荒茶（加工）	2,910	1,671	6位
いちご	5,080	4,310	12位
なす	10,600	2,289	16位
ほうれんそう	5,900	2,629	19位
切り花キク	5,520(万本)	2,055	7位
米	53,200	14,229	41位

資料：近畿農政局奈良統計情報事務所

このような全国的情勢を踏まえ、国においては、昨年6月に、これまでの木材生産を主体とした政策を抜本的に見直すため、「森林・林業基本法」を制定しました。

この基本理念として

- ①森林の有する多面的機能の発揮
  - ②林業の持続的かつ健全な発展
  - ③林産物の供給・利用の確保
- を今後の基本としております。

本県におきましても、国の新たな基本理念のもとに「森林の有する多面的機能の発揮と林業・木材産業の持続的かつ健全な発展」を林政の目標に掲げ、諸施策を総合的に実施し、森林の整備や林業・木材産業の振興並びに山村の活性化等に積極的に取り組んでまいります。

## 〔工業〕

奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・薬・漆器・素麺・清酒・茶釜・割箸・赤膚焼など、江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多くあります。

江戸時代には、奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業が発達していました。明治7年(1874)には奈良県は全国の中で、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、菜種油9位の生産をあげ全国でも先進的な地域に属していました。そのため資金が豊富で明治16年(1883)には早くも近代的紡績工場が設立されましたが、この工場は石炭の入手や、営業面でもおもしろいはず廃業となりました。

明治26年(1893)、同29年(1896)に新たな近代的紡

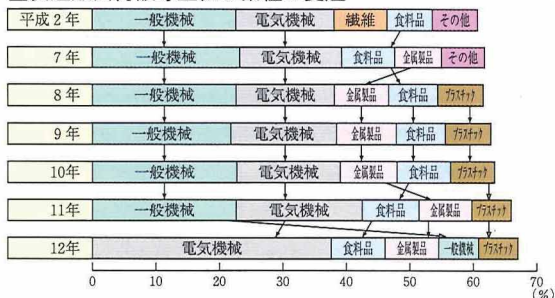
績工場がそれぞれ設立、同27年に電気・同44年にガスの供給がはじまるなどめざましく近代化していきました。

しかし、奈良の位置が東西幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年(1919)にもちこされました。

昭和のはじめには、紡績業の生産は安定し木綿や絹から変わったメリヤス、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の形成も進みましたが、戦争のために挫折するものが多くありました。

戦後、奈良県も復興の途につきましたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度成長期にも繊維、木材、食品等の業種が大きなウエイトを占めていました。本県は内陸に位置し港湾を持たないので、重化学工業には工場立地の上で制約が大

□製造品出荷額等上位5業種の変遷



(注) 統計処理上「一般機械」から「電気機械」への移動が発生したため、「一般機械」の金額が12年は大幅に減少した。

きかったためです。このため、昭和30年代末から県では工業団地の開発に取り組み内陸型工業の誘致・育成に努めるとともに県内工業の活性化をめざし中小企業団地の開発を支援してきました。

昭和40年代に入って、昭和工業団地等が本格的に操業を開始すると、一般機械、電気機械等の重化学工業の製造品出荷額等は飛躍的に増加し、重化学工業の占める割合は昭和40年代初めまで、20%以下だったのが、昭和60年には50.3%と過半数を超えました。

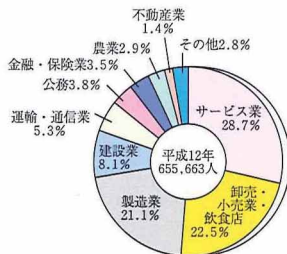
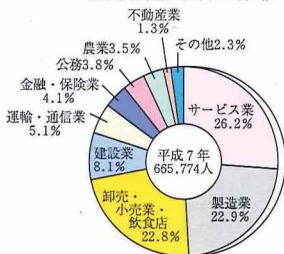
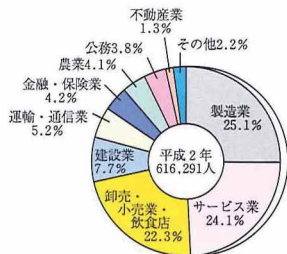
奈良県の地場産業としては、靴下・ニットなどの繊維、木材、機械金属をはじめ、プラスチック形成、毛皮革製品、サンダル、スポーツ用品などがありますが、最近では、創業や経営革新への支援体制が整備され、県内の起業化シーズの発掘、育成や、県外企業の進出を促進することなどによる産業集積が図られています。

## 〔商業〕

江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ2大商業中心地でした。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展していました。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に包含され本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わりませんでした。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（現在の近畿日本鉄道）上本町～奈良間の開通をはじめとする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるどころもありました。

産業別就業者の推移





しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもありました。昭和5年の国勢調査によると、商業従業者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分1人で営業しているものが32%も占めていました。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（現在の奈良銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献しています。

昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、こうした傾向は購買力を高め、商品販売額の増加に結びつきました。平成9年の商業統計によれば、本県小売業の年間商品販売額は1兆3,230億円で、景気が停滞するなかで、堅調な伸びを示しています。

一方、今日の中小小売商業を取り巻く環境は、消費者ニーズの多様化・高度化、モータリゼーションの進展、都市構造の変化による都市中心部の既存商店街と郊外の新商業集積との競争の激化などにより、厳しさを増しています。

これからの奈良県の商業の発展のためには、単なる買い物場の場のみではなく、人と人とがふれあい・憩い・集う「暮らしの広場」としての商店街づくりなどが求められています。



東向商店街（奈良市）

## 文化・観光

豊かな自然と世界に誇る重要な文化遺産に恵まれている奈良県は、古代から政治の中心として、大陸からの文化を積極的に取り入れてきました。特に古墳時代、飛鳥時代、奈良時代には遣隋使・遣唐使等の国際交流を通じて日本文化の基礎を築きあげ、さらに中世には、社寺・町屋を中心に能・狂言の発祥地として、日本文化の発展に貢献してきました。

また、近世から明治・大正・昭和にかけて多くの時代を代表する人物が、奈良の豊かな自然とそこに住む人々が育んできた伝統文化を賛美してきました。奈良は、「日本人の心のふるさと」であり、世界に誇り得る日本文化の中心となっています。

こうした奈良が育み培ってきた貴重な文化遺産や歴史的風土の保存を図るとともに、「世界に光る奈良県づくり」をめざして、新たな個性と魅力にあふれた奈良県文化を創造し、次の世代に引き継いでいくことが今後の大きな課題となっています。

本県の観光には、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財などをめぐる観光と、山岳地域の自然に親しむ観光の二つの面があります。

奈良・斑鳩をはじめとする各地の古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、国宝・重要文化財の数は、東京・京都について全国第3位で、国宝建築物の数は、全国第1位です。古社寺のほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡や南朝のおかれた吉野の地などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れる人々は

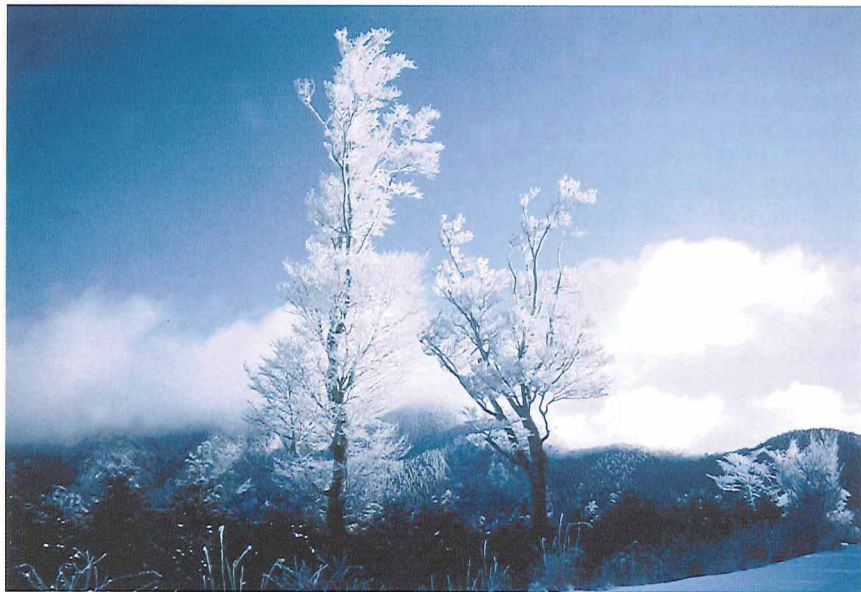


修復された室生寺五重塔（室生村）

後をたちません。

また、千年以上の歴史をもつ吉野山の桜、月ヶ瀬梅溪の梅などの季節の花々や、大台ヶ原の景観、大和アルプスと称される大峰山脈を中心に2,000m級の山々が連なる吉野熊野連山の雄大な自然が、全国的に都市化の進展によって緑が失われていく中で今なお美しい姿を残し、人々のところに安らぎを提供しています。

本県には毎年多くの観光客が訪れていますが、余暇の重要性が見直されている昨今、観光需要は今後さらに質・量ともに高くなるでしょう。こうした中で奈良県はますますその価値を高めつつあります。



高見山霧氷（東吉野村）

# 主要山岳一覽表

(単位：m)

山 岳 名	標 高	所 在 地	山 岳 名	標 高	所 在 地
若 草 山	342	奈 良 市	白 鬚 岳	1,378	吉野郡川上村
三 輪 山	467	桜 井 市	大台ヶ原山	1,695	吉野郡上北山村(三重県境)
耳 成 山	140	橿 原 市	山上ヶ岳	1,719	吉野郡天川村
天香久山	152	◇	大普賢岳	1,780	吉野郡上北山村(天川村境)
畝 傍 山	199	◇	弥 山	1,895	吉野郡天川村
生 駒 山	642	生 駒 市(大阪府境)	八 剣 山	1,915	吉野郡上北山村(天川村境)
信 貴 山	437	生駒郡平群町	仏生ヶ嶽	1,805	吉野郡上北山村(十津川村境)
二上山(雄岳)	517	北葛城郡當麻町	釈迦ヶ岳	1,800	吉野郡十津川村(下北山村境)
葛 城 山	959	御 所 市(大阪府境)	涅槃 岳	1,376	吉野郡下北山村
金 剛 山	1,125	◇	笠 捨 山	1,352	吉野郡十津川村(下北山村境)
俱留尊山	1,038	宇陀郡曾爾村(三重県境)	玉 置 山	1,076	◇
三 峰 山	1,235	宇陀郡御杖村( ◇ )	伯 母 子 岳	1,344	吉野郡野迫川村(十津川村境)
高 見 山	1,248	吉野郡東吉野村( ◇ )	護 摩 壇 山	1,372	吉野郡十津川村(和歌山県境)
竜 門 岳	904	吉野郡吉野町	牛 廻 山	1,207	◇ ( ◇ )
国 見 山	1,419	吉野郡東吉野村(三重県境)	冷 水 山	1,262	◇
池 木 屋 山	1,396	吉野郡川上村( ◇ )			

資料：国土交通省国土地理院「日本の山岳標高一覧表-1003山-」

# 主要河川一覽表

(延長10,000m以上)

(平成13年4月1日現在)

河川名	延長m	上流端	河川名	延長m	上流端
<b>淀川水系</b>	<b>287,005</b>		布留川	11,220	天理市荳原町字下代
宇陀川(黒田川を含む)	26,865	大平川合流点	岩井川	10,150	奈良市紀寺町字中谷
布目川	24,000	天理市福住町字馬返	<b>紀の川水系</b>	<b>355,690</b>	
青蓮寺川	16,850	タコラ川の合流点	紀の川(吉野川を含む)	70,050	吉野郡川上村(三ノ公川合流点)
名張川	16,300	オオクタ川の合流点	丹生川	32,100	吉野郡黒滝村大字中戸
白砂川	14,700	奈良市横田町	高見川	22,300	吉野郡東吉野村大字杉谷
笠間川	14,400	山辺郡都祁村大字吐山	津風呂川	17,600	宇陀郡大字陀町大字栗野
室生川	13,400	宇陀郡室生村大字田口元上田口	四郷川	13,200	吉野郡東吉野村大字麦谷
芳野川	13,240	宇陀郡菟田野町大字岩端	宗川	12,000	吉野郡西吉野村大字西日裏
遅瀬川	11,800	山辺郡山添村大字切幡	<b>新宮川水系</b>	<b>415,612</b>	
打滝川(今川を含む)	10,300	奈良市別所町	新宮川・熊野川 (川上川・天川・十津川を含む)	113,700	吉野郡天川村大字北角
<b>大和川水系</b>	<b>591,967</b>		北山川	50,540	吉野郡上北山村大字西原
大和川	42,371	桜井市大字小夫地先	川原樋川	27,800	吉野郡野迫川村大字檜股
曽我川	26,896	御所市大字重阪	西の川	22,100	吉野郡十津川村大字小坪瀬
寺川	23,270	桜井市大字鹿路	東の川	14,500	吉野郡上北山村大字小椽
葛城川	23,246	御所市大字鴨神	上湯川	13,200	吉野郡十津川村大字上湯川
飛鳥川	22,296	高市郡明日香村大字栢森	西の川	12,900	吉野郡下北山村大字池峰
富雄川	21,614	生駒市高山町	神納川	12,300	吉野郡十津川村大字杉清
佐保川	14,823	奈良市中ノ川町	旭川	11,100	吉野郡十津川村大字旭
葛下川	14,740	北葛城郡當麻町大字南今市	中原川	11,000	吉野郡野迫川村大字上
竜田川	13,239	生駒市俵口町	小原川	10,840	吉野郡大塔村大字篠原
高田川	13,045	北葛城郡新庄町大字南藤井			

資料：県河川課